

33 “遺産” 一人平均 149万円

かにかくにすべなきものは老いにぞありける——これは良寛さんの長歌の終
わりの一句です。すべ（術）なきものの極みが、死を前にする人の立場です。
肉体の苦痛、悲しさと恐怖の苦惱、どんなに愛しても代わって引き受けられま

せん。それを全く無防備のまま、一身に引き受けるのが人間。

草木や他の動物は枯れ朽ちて土に還る。人間は意識を残す限り、ひとり死をわがものとして引き受けねばなりません。自分の全生涯を厳粛に自分で収束する存在。あの世への出発のため、有形無形の準備を営むものです。普通、死は前ぶれがあるからです。

物質的な準備でいえば、先の死の床で娘に罵倒されていたTさんは、葬式代として七十万円を残していました。子らに葬式を出してもらえないかも、と覚悟していたからです。しぶしぶ臨終ぎりぎりによって来た子らの最初に尋ねたことはやはり葬式代のことでした。

ホームに入ってお金をためようと考えている人がいるはずはありません。しかし、ここで少し、お金について。

ホームにいます、お金がたまるのです。最低の収入でも（老齢福祉年金です）こつこつためて葬式や墓代に。時々家族とのきずなを保つためにも。

昭和六十三年から翌六月までに八人が死に、一人平均百四十万余円の遺産で

した。Tさんは、使用しているおしめからこっそり新しい布を抜いて、自分の肌着にするほどのつましさでした。現在、一人平均の預金は百八十余円。

その金をめぐって、時に「部屋普請するから」とか「孫の結婚資金に」とかで、家族と本人との綱引きがあります。家族に、とはいえ、お金や通帳をとりあげられると、氣力を失い死期を早めかねません。預金や年金は命みたいなものです。

こうしてお金を筆頭に、どう死出の準備をしておくか。それが特別養護老人ホームでの高齢者の明け暮れです。とつおいつ心の準備に多忙です。

がん末期の神田シメさんは、まだベッドに起き直り、ほんの少しずつの編み物をつけ、手を休めては「これを着ることもないけど」と、声はかすれます。

普通、終末は静かな個室で、濃密な看護の下、頻繁な訪れもあって寂しくはありません。神田さんに、そこをおすすすめしても、「ここがよい。花たちが眺められるもの。あとわずかの命です。このままが極楽」。

眼にしている庭は私たちの手づくり、花壇などと呼べるほどのものではありません。

ません。こぼれ種子の鳳仙花が盛りをすぎていても、一夏親しんだ彼女には深き思いが……。何と深い眼でしょう。支柱をそえていく園長の後ろ姿に、「あと何日でしょう。この花を見ながら逝（ゆ）けるのですね」。合掌。園長も同じく合掌。

「災難に遭う時節には災難に遭うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候（そうろう）。これ災難をのがるる妙法にて候」（良寛）。神田さんははやその達観にいたっています。人間にとって至難な死の受容が、ただの人たちの間で、こうして成就していくのです。

神田さんはただの人。二十七年間の養護老人ホーム生活は彼女をすっかり自己防衛的にしてしまい、弱って任運荘に来て、同室の衰弱した人からナースコールを押して、と頼まれても、「ひととはひと。ひとの世話なんてでけん。子供のない自分は自分で守らにゃ」と応じません。

彼女一人だけ寮母を先生と呼びます。「あの連中、先生と云うてあげるとようしてくれる」と、同室者を啞然とさせます。これも、やはり死への準備でし

よう。おしぼりで鼻や耳の穴まで拭くので注意されると、「チャ、男んくせに、手足かなわんくせして、言うことは一人前。女んごと文句たれるわ」と怒鳴り返します。

しかし、病重く、がんで入院。早々と退院。「病院は絶対もう行かん。ここで死なせてっ!」。治療中心の病院生活にすっかり懲りて、心がやわらかくなつたのです。しかし、やがて重態。寮母たちの足はしげく、優しさはいよいよ深く。「おしっこ出しても心配いりません。いつでも呼んで下さいね」。それだけで眼うるませる神田さん。

生きることは願うこと。死の準備においてこそ、ひとの願いは主体的になります。力をこめて生をまっとうしようとしています。しかし、支えられる者は実は支えており、支えている者は支えられているのが支えの真の構造です。静かにほほえむ神田さんにだれもが仏さんを見ています。